

# SHOW HEY シネマルーム

★★★

## Data

監督：ホアン・ヤーリー  
出演：リアン・チュンウェ／リー・  
ミンウェイ／イアン・シェン  
／イーブン・シェン／デブ  
ン・ホー

## 日曜日の散歩者 わすれられた台湾詩人たち

2015年・台湾映画  
配給/ダゲレオ出版・162分

2017 (平成29) 年 8月 16日鑑賞

DVD鑑賞

### ■ ショートコメント ■

◆本作についてはプレスシートをそのまま引用しておく。

#### ■ 1930年代、日本統治下の台湾に出現したモダニズム詩人団体、「風車詩社」

1930年代、日本による植民地支配が40年近く経過した、日本統治期の台湾。台南という地方都市で、日本語で詩を創作し、新しい台湾文学を創りだそうとした、モダニズム詩人団体、「風車詩社」。植民地支配下で日本語教育を受け、日本留学をしたエリートたち。日本近代詩の先駆者であり世界的評価を得ているモダニスト西脇順三郎をはじめとする、日本文学者たちとの交流から、日本文学を通してジャン・コクトーなどの西洋モダニズム文学に触れる中で、若きシュルレアリストたちの情熱が育まれていった。日本語で新しい台湾文学を生み出そうとした彼らは、戦後の二二八事件、白色テロなど、日本語が禁じられた中で迫害を受けていく。植民地支配、言論弾圧という大きな時代の渦の中に埋もれていった創作者たち。その情熱は現代を生きる私たちに、何を問いかけてくるのか。

#### ■ 台湾アカデミー賞こと、金馬奨最優秀ドキュメンタリー賞をはじめ、多くの国際映画祭を席卷！

「懐日」ブームの台湾で発見された、歴史の波に埋もれていた若き詩人たちとその詩

近年、「懐日」ブームの台湾では、『KANO 1931 海の向こうの甲子園』『鴻生回家』など、日本統治時代に関連する映画が多く作られている。黄亞歴監督の長編初監督作品となる本作も、台湾のアカデミー賞と言われる、第53回金馬奨最優秀ドキュメンタリー賞を受賞した注目作である。黄監督は林永修（修二）の詩を通して、台湾でも忘れられた存在であった「風車詩社」を知り、日本統治期の台湾にこのような創作をしていた詩人たちがいたことに衝撃を受けたという。元メンバーの家族、研究者など関係者へのインタビュー、資料調査など、約3年をかけて製作された本作は、文学的視点からも大変貴重な作品となっている。

#### ■ 台湾発・社会派文芸映画！

貴重な資料と共に忘却の彼方に置き去りにされた台湾文学、

政治に翻弄された過酷な運命が甦る ——

本作は、詩の朗読、過去の写真やシュルレアリスム芸術作品を多用した貴重な資料映像、前衛的な手法の再現パートの、3つの要素で構成されている。台湾でも歴史の波に埋もれ、忘却の彼方に置き去りにされていたモダニズム詩人団体「風車詩社」の文学を通して、当時の台湾と日本の関係や、政治弾圧という社会的な側面が浮かび上がる。日本語で創作する事への葛藤を抱きながらも、ジャン・コクトーや西洋モダニズム文学への憧れを、美しく軽やかな日本語で昇華させた文学作品は、純粋なまでの芸術性と語感を持って、80年以上の時を経て色褪せない独自の文学として私たちを魅了する。

◆本作の物語も、プレスシートをそのまま引用すれば次の通りだ。

1930年代、日本による植民地支配が40年近く経過した台湾は、安定した同化の段階に至っていた。この時期において台湾に登場したのが、モダニズム詩人の団体としては最も早い、「風車詩社」である。

日本の文学者たちとの交流や、留学先の日本で最先端の文化や芸術に触れる中で、西洋モダニズム文学の波は、台湾の若き詩人たちに大きな衝撃をもたらした。マルセル・ブルースト、ジャン・コクトーなど、西洋モダニズム文学に対し大きな憧れを抱いた彼らは、仕事が休みの日曜日になると、古都・台南を散歩しながら、シュルレアリスム詩について語り合った。母国語ではない日本語で詩作する事への葛藤と哀しみを抱きつつ、彼らは自分たちの台湾文学を築こうと、同人雑誌『風車』を創刊した。しかし植民地支配下の台湾ではプロレタリア文学が主流であり、彼らのシュルレアリスム詩は理解されず、風車詩社は1年半で活動を終える。

1937年、盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が勃発する。日本の敗戦を経て、戦後は蒋介石の中国国民党による独裁時代へと移っていく。1947年の二二八事件では、風車詩社の主要メンバーであった楊熾昌と張良典が無実の罪で入獄させられ、1952年には白色テロによって李張瑞が銃殺された。

日本語で自分たちの新しい台湾文学を築こうとした、シュルレアリスム詩人たちの葛藤と、その時代の日本人文学者たちとの交流、そして西洋モダニズム文学のもたらした衝撃が、貴重な資料映像と、彼らの詩と共に映し出されていく。

◆本作に登場する台湾詩人たちの名前を私は全く知らなかったが、プレスシートによるとそれは次の4人だ。

■楊熾昌(よう・ししょう) / 1908-94年



筆名に水陸萍。詩人・新聞記者。台湾の文壇にモダニズムを導入した先駆者。台南市に生まれ、台南第二中学校(旧制、現在の台南一中)を卒業し、日本に赴いて東京の文化学院に留学した。授業以外の時間はカフェに入りびたり、多くの文学関係者と知り合い、西洋のモダニズム文学が流行する時代の空気のにめり込んだ。詩を作っては『雑の木』『神戸詩人』『詩学』などの日本の雑誌に発表したという。1933年3月、李張瑞や林永修、張良典らと「風車詩社」を結成し、同人雑誌『風車』を刊行した。

1934年に『風車』が停刊して後、父親の遺言に従い1935年12月『台湾日日新報』の記者となって、長く新聞社に勤めた。1938年西川満が主宰する台湾詩人協会(1940年改組して台湾文芸家協会となり、機関誌『文芸台湾』を発行した)に加わる。1947年二二八事件の際には無実の罪で入獄した。

出獄後は『公論報』台南支社の主任を務め、1952年李張瑞が逮捕された後は辞職し筆を断った。1953年台南ロータリークラブ及び台南市文献委員会などに奉職し、1978年には詩人の羊子喬との交流から再び文壇に出て、台南県の「塩分地帯文芸キャンプ」が贈る台湾新文学特別貢献賞を受賞し、晩年になって文壇の高い評価を得た。

■李張瑞(り・ちようずい) / 1911-52年



筆名に利野蒼。台南県関廟出身。雙葉小學校卒業後、製糖工場で働く父に従って、一家は車路墩製糖工場に住んだ。楊熾昌とは台南第二中学校の友人で、のち日本に留学し、農業大学を卒業した。台湾に戻ってからは、仕事の関係で台南郊外の新化に住んだ。

数多くの西洋文学、ブルーストの『失われた時を求めて』の「スワン家の方へ」(山内義雄訳)やゲーテ『若きウェルテルの悩み』などに触れた。のち長く嘉南大圳(だいしゅう)水利組合に勤めた。戦後は国民党の白色テロに遭い、政治事件に関与したとの無実の罪にて、判決書が家族のもとに届く前に銃殺された。

■林永修(りん・えいしゅう) / 1914-44年



筆名に林修二、南山修。台南県麻豆鎮出身で、麻豆の名家である林家に生まれた。麻豆公学校や麻豆小学校で学ぶ。台南第一中学校在学中に文学の創作を開始した。のち日本に留学し、慶應義塾大学英文科で学び、西脇順三郎に師事した。文学創作は詩を中心とするが、随筆の佳品も多い。作品の多くは『台南新報』や『台湾新聞』に投稿したが、日本留学時期の作品は大学の雑誌『三田文学』や同人雑誌『四季』以外に、台湾の新聞メディアである『台湾日日新報』にも発表した。創作スタイルは日本の「四季」派の詩風に近く、「物に寄せて思いを陳(の)べる」、つまり内面の感情(孤独感、喪失感など)を物に託して語るもので、追憶の感情を捉えて詩にすることを好んだ。象徴主義の感覚(色彩、香り、聴覚)を用いて、心の奥底の感受性や精神的な気分を表現した。

■張良典(ちやう・りょうてん) / 1915-2014年



筆名に丘英二、椿翠葉。台南県仁徳郷出身。父親は車路壩製糖工場(現在の仁徳製糖工場)に勤めており、幼いころから製糖工場の宿舎に住んだ。台南第一中学校在学中に林永修と知り合う。中学卒業後は、台湾総督府台北医科専門学校に入学した。医専在学中に「風車詩社」が結成され、林永修に誘われて加入し、1935年には「台湾文芸聯盟」にも加わった。医専の仲間十数名と文学雑誌『杏林』を一号のみ共同編集し、また「台北仏教青年会」に加わったという。趣味はスポーツで、テニスや野球、マラソンなど。戦後二二八事件に際し、数か月入獄を経験。その後台南市の大同路に「良典医院」を開いた。作品は多くはないが詩を主とし、散文詩の方法で書いた。

萩原朔太郎の作品から影響を受け、激しく感傷的なノスタルジーを帯びている。

2017(平成29)年8月17日記